

2016年4月 熊本地震
車中避難をされておられる方々への支援のためのアンケート
第1次報告書
(概要版)

2016.5.9

こころをつなぐ「よか隊ネット」調査責任者：稲月正（北九州市立大学基盤教育センター教授）

※本調査はランダムサンプリングに基づくものではない（そもそも車中避難者のリストは作成不可能でありランダムサンプリングは不可能である）。したがって、ここでの数値は車中避難者全体の傾向を代表するものではない。しかし、状況の理解、仮説索出、類型構成には有効であると考ええる。

I. 調査の概要

1. 目的

- ①熊本地震で車中避難を余儀なくされておられる方々（以下、車中避難者）の状況をお聞きし、今回ならびに今後の震災被災者支援に役立てる。
- ②震災支援や復興に関する行政への提言を考えるための基礎資料とする。
- ③車中避難者の状況・意見を都市型災害の貴重な記録として残す。

2. 方法

- (1) 調査地：熊本市内、益城町、御船町 ※詳しくは「別紙資料」を参照
- (2) 調査期間：2016年4月26日～5月4日（9日間／第1期）
- (3) 方法：調査票を用いた個別面接法（「出水南公園」「北区新地公園」分14票は留め置き）
※調査票については「別紙資料」を参照

3. 対象者

- (1) 人数：車中避難者131名（車横でのテント生活者含む）
- (2) 性別：女性69名（52.7%）、男性61名（46.6%）、不明1名
- (3) 年齢：10代 1名（0.8%）、20代12名（9.2%）、30代19名（14.5%）、40代33名（25.2%）、50代26名（19.8%）、60代27名（20.6%）、70代以上12名（9.2%）、不明1名
- (4) 世帯全員が車中避難か：一緒に避難66名（50.4%）、分かれて避難38名（29.0%）、単身者18名（13.7%）、その他・不明9名（6.9%）
- (5) 自宅からの距離：今と同じ町内59名（45.0%）、1～3km以内48名（36.6%）、4～5km以内16名（12.2%）、6～10km以内5名（3.8%）、不明3名（2.3%）

II. 結果の概要

1. 車中避難を始めた事情

- ①車中避難開始日は、4月14日（前震日）40.5%、4月16日（本震日）38.9%であった。

車中避難を始めた事情(最も大きなもの)	人数	%
再び大きな地震があるのではないかと不安なため	41	31.3%
余震が続いていて、自宅で寝るのが不安なため	35	26.7%
自宅に大きな損傷があり、住める状態ではないため	35	26.7%
自宅には目立った損傷はないが、家具などが片付いていないため	2	1.5%
いざというときに逃げるためには車が必要なため	1	0.8%
避難所での生活より車中避難の方がよいと思うため	7	5.3%
その他	8	6.1%
1つには決められない	2	1.5%
合計	131	100.0%

②車中避難の理由(最も大きいもの)は、順に「再び大きな地震があるのではないかと不安なため」(31.3%)、「余震が続いていて自宅で寝るのが不安なため」(26.7%)、「自宅に大きな損傷があり住める状態ではないため」(26.7%)で

あった。「余震への不安」と「家屋の損壊」の2つが大きな理由である(これらは、車中避難に限らず、震災避難についての一般的な理由であろう)。

- ③車中避難の理由を複数回答で尋ねたところ、約8割の人が「余震への不安」を挙げた(「余震が続いていて自宅で寝るのが不安なため」は78.6%、「再び大きな地震があるのではないかと不安なため」は75.6%であった)。
- ④「余震への不安」と「自宅の損壊状況」とのクロス集計では、自宅が「あまり損傷を受けていない」と答えた人(42人)の8割以上が「余震への不安」を車中避難の理由として挙げていた。建物の状態とは独立に、心理的な不安も避難行動に影響を与えていると考えられる。

2. 避難所ではなく車中避難を選んだ理由

- ①「避難所での生活よりも車中避難の方がよい」を車中避難の「最も大きな理由」としてあげた人は5.3%にとどまった(上図)。しかし、複数回答で理由を尋ねた場合、55.7%がそれを車中避難の理由としてあげている。
- ②その理由を自由回答で尋ねたところ、「避難所ではプライバシーが守れない」「小さい子ども、高齢者、障がいを持った人がいるため周囲に気を遣う」「ペットがいるため」「建物は危ない、建物の中は怖い(車の方が揺れが少ない)」「自宅に近く安心」といった回答が多かった。

3. 車中避難で困っていること

- ①「車中避難で困っていること」を複数回答で尋ねたところ、最も多かったのは「衛生・健康」に関わることであった(「トイレ」49.6%、「お風呂」43.5%、「健康」40.5%、「水」29.8%)。
- ②「情報・相談」に関することをあげる人も多く、「必要な情報が届かない」は22.9%、「相談先がないこと」は22.9%であった。
- ③「生活不安」も大きい。「将来の生活が不安」は28.2%、「生活費」については16.8%が「困っていること」としてあげている。「育児」や「介護」(各9.8%)もここに入れることもできよう。これらは支援制度とのかかわりも強く、その意味では「情報・相談」体制

に関連する不安とも考えられる。

車中避難をする上で困っていること(複数回答)	人数	%
水(飲料水)	39	29.8%
トイレ	65	49.6%
お風呂	57	43.5%
衣類	19	14.5%
健康	53	40.5%
必要な情報が届かないこと	30	22.9%
相談先がないこと	20	15.3%
話す人などがおらず孤独なこと	6	4.6%
介護	12	9.2%
育児	12	9.2%
通勤	8	6.1%
生活費	22	16.8%
将来の生活が不安なこと	37	28.2%
その他	41	31.3%

- ④自由回答では、「衛生・健康」に関しては「足を伸ばせない」、「ゆっくり寝られない」、「疲れがとれない」、「エコノミークラス症候群が心配」といった回答が多かった。中には「14日の車中生活で足がむくんでいる」「心臓の持病があるが病院と連絡が取れず、薬もあと1週間分しかない」といった深刻なものもあった。「情報・相談」に関わることとしては「役所での手続きに時間がかかる」「地震保険など、保険制度がよくわからない」「相談先もないし、役場も機能していない」「情報がなかなか届いてこない」等があげられていた。「生活不安」については「家がないので将来が不安」「生活再建の方法が見つからない」「リフォームするかどうか金銭面で心配」「家族がバラバラに暮らしている」「家族やペットといっになったら一緒に住めるのか」「娘は精神的にダメージを受け表情を失った」「不安な気持ちで整理できない」等である。また、「思春期の女性3名と生活しているので治安が心配」「車上荒らしが心配」といった治安に関する不安もあった。

4. 車中避難をやめるために必要なこと

- ①「車中避難をしなくてすむようになるために必要なこと」(複数回答)として最も大きいのは「精神的な不安の解消」(42.7%)であった。この「不安」には「余震への不安」「住まいへの不安」「今後の生活への不安」など様々なものが含まれていると思われる。「その他」(21.4%)も多く、その内訳(自由記述)を分類したところ「余震がおさまること」が16.0%、「自宅の診断や安心の確保」が7.6%、「安心できる建物・避難所」が3.8%であった。多くの人が余震、生活、自宅・建物についての不安の解消を必要としている。
- ②自宅の「改修・耐震工事」(38.9%)や「片付け」(26.0%)をあげる人も多かった。
- ③「公営住宅や仮設住宅への入居」をあげた人も32.1%と多かった。
- ④「自宅の損壊状況」と「車中避難をしなくてすむようになるために必要なこと」(最も大

きなことを1つ)との間には明確な関連が見られる。(ある意味当然ではあるが)「全壊・半壊」では「公営住宅や仮設住宅への入居」を上げる人の比率が高い(66.7%)。「全・半壊ではないがかなりの損傷を受けた」では「自宅の改修・耐震工事」(40.4%)、また「あまり損傷を受けていない」では「精神的な不安の解消」(31.0%)や「その他(主な内容は上記)」(33.3%)の比率が高かった。

	自宅の改修・耐震工事	自宅の片付け	公営住宅や仮設住宅などへの入居	精神的な不安の解消	いつでも相談できる相談先	水、ガス、電気などライフラインの復旧	その他	合計
全壊・半壊状況	4 13.3%	1 3.3%	20 66.7%	1 3.3%	0 0.0%	0 0.0%	4 13.3%	30 100.0%
全・半壊ではないが、かなり損傷を受けた	21 40.4%	5 9.6%	6 11.5%	10 19.2%	1 1.9%	2 3.8%	7 13.5%	52 100.0%
あまり損傷を受けていない	3 7.1%	2 4.8%	2 4.8%	13 31.0%	0 0.0%	8 19.0%	14 33.3%	42 100.0%

5. 行政からの説明

①車中避難の場で行政(県や市の職員)からの説明や状況の聞き取りを受けたことが「まったくなかった」と答えた人は78.6%であった。「あまりなかった」(4.6%)とあわせると今回調査対象となった車中避難者のうち8割以上の人は、直接、行政からの説明等を受けていない。職員の人数、車中泊の時間帯(夜間)の問題(夜間)等はあるが、指定避難所以外の場所に避難している人たちに対しても、しっかりとした情報提供の仕組みが必要であろう。

車中避難を始めてから、この場所で行政からの説明や聞き取りはあったか	人数	%
まったくなかった	103	78.6%
あまりなかった	6	4.6%
少しはあった	15	11.5%
かなり頻繁にあった	5	3.8%
不明・無回答	2	1.5%
合計	131	100.0%

②先に「困っていること」として「必要な情報が届かないこと」をあげた人が22.9%いることを示した。「行政からの説明や事情の聞き取り」が「まったくなかった」人では「必要な情報が届かないこと」を「困っていること」としてあげた人は27.2%であったのに対して「すこし・かなり頻繁にあった」では10.0%であった。

6. 行政への要望

- ①「行政への要望」(自由回答)については「住宅の確保」「情報の提供」「避難所間の格差解消」に関する事柄が多かった。
- ②「行政への要望」を11項目に整理したところ、件数上位5項目とその主な内容は下記の

通りであった。

(1)仮設住宅等への入居に関すること (31 件)

- ・ 仮設住宅を早く設置してほしい
- ・ 入居に関しては弱者を優先してほしい

(2)住宅の修復費用や生活保障に関すること (21 件)

- ・ 家の修理費や水道の補修費などを出してほしい

(3)情報提供や情報収集に関すること (20 件)

- ・ 仮設住宅や補償など必要な情報を適切に提供してほしい
- ・ 自主避難者の状況把握をしてほしい

(4)指定避難所とそれ以外の避難所との格差に関すること (18 件)

- ・ 指定避難所と自主避難をしているところでの支援物資の届き方を平等にしてほしい
- ・ 自主避難者にも目を向けて対処してほしい

(5)住宅の安全性などに関すること (17 件)

- ・ 家の検査や判定をしてほしい

7. 今後の生活の見通し

①「今後の生活の見通し」が「まったく見えていない」は 34.4%、「あまり先が見えていな

これから先の生活の見通しはついているか	人数	%
まったく見えていない (全く見通しが立っていない)	45	34.4%
あまり先が見えていない (あまりたっていない)	34	26.0%
少し先が見えてきた (すこしたってきた)	34	26.0%
かなり先が見えてきた	15	11.5%
不明・無回答	3	2.3%
合計	131	100.0%

い」は 26.0%であった (両者をあわせると約 6 割に達する。)

②自宅が「全・半壊」の人では「今後の生活の見通し」が「まったく・あまり見えていない」人の比率が約 9 割に達する。早急な住宅・生活支援が必要である。

	まったく見えていない	あまり見えていない	少し先が見えてきた	かなり先が見えてきた	合計
全壊・半壊状況	19	9	2	1	31
	61.3%	29.0%	6.5%	3.2%	100.0%
全・半壊ではないが、かなり損傷を受けた	19	18	15	2	54
	35.2%	33.3%	27.8%	3.7%	100.0%
あまり損傷を受けていない	6	7	16	12	41
	14.6%	17.1%	39.0%	29.3%	100.0%